

東北アジア研究センターは、様々な機会を利用して社会に研究成果を市民の皆様に還元する活動を行っています。

講座：「東北アジアの人間と環境」

日本人は、歴史上東北アジアと深く関わってきました。中国の文化が日本に多大な影響を与えたことはよく知られています。それは、中国で出版された書籍を通じてでしたが、開国後の日本人は、実際に中国を訪れ、その多様な文化に接しました。日本は常に東北アジアに近くあったのです。日本と東北アジアの近さは、自然環境の面からもいうことができます。日本列島と東北アジアは、同じ地質の構造を共有します。私達は、物言わぬ大地の構造からも、その近さを実感するでしょう。そしてまた現在、日本の技術は、東北アジアと日本をつなぐ大きな可能性を秘めています。

東北アジアは、このようにわが国にとって「一衣帯水」の地域なのですが、その近さがなかなか実感されにくいのも確かです。東北アジアと日本の「近さ」をキーワードとして、歴史・文化・自然・技術という四つの側面から、東北アジアと日本のつながりを2013年10月下旬から11月上旬に4回にわたり講義を行い、市民のみなさまと考えてみました。

10月23日(水) 18:00-20:00 「歴史の中の東北アジアと日本」

岡 洋樹 先生



20世紀、日本は東北アジアと深い関わりをもちました。日本人たちは、東北アジアを「大陸」とか「満蒙」などと呼びましたが、「満蒙」とは「満洲」(マンジュ)と「蒙古」(モンゴル)のことです。20世紀初頭に日本人が出会ったマンジュとモンゴルとは何だったのでしょうか。この講義では、この問題を17世紀から20世紀初めまで、三百年にわたって中国に君臨した清朝の歴史にさかのぼりつつ講義しました。



『滿洲実録』



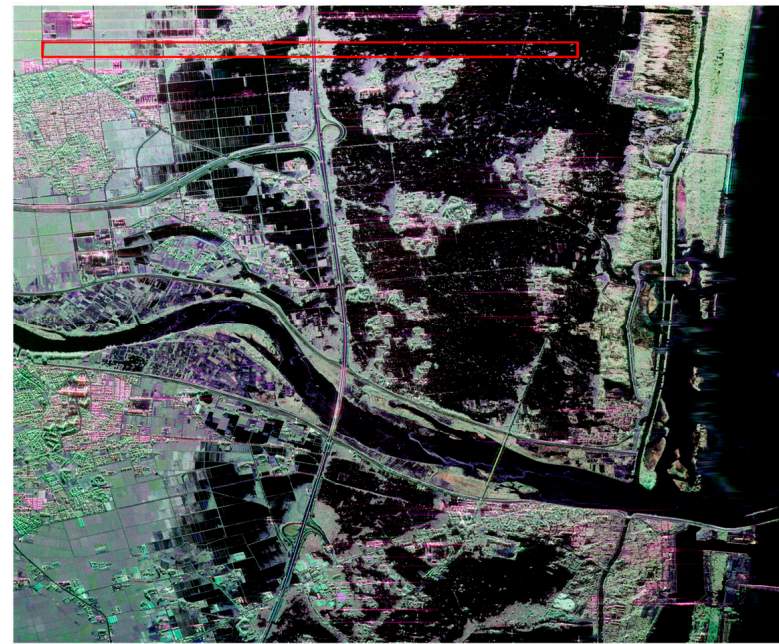
滿洲実録国地図 1933年

10月30日(水) 18:00-20:00 「電波で見る東北アジアの自然と環境」

佐藤
源之先生



この講義では、衛星や、航空機を利用する広域リモートセンシングから地中レーダーを利用する精密な地下計測まで、電波を利用した環境、地下計測の手法と、これを東北アジアや日本に適用した実例を紹介します。特に東日本大震災の被災地が宇宙からどのように観測されたのか、また被災地での住宅高台移転を推進するための遺跡調査や被災者捜索活動等、最近の話題についてもお話ししました。



2011年3月12日 名取川河口付近のリモートセンシング画像 (PI-SAR2)



震災復興に伴う高台移転予定地での地中レーダーを利用した遺跡調査

11月6日(水) 18:00-20:00 「戦国大名家の書籍蒐集と東北アジア」

磯部
彰先生



戦国末期の大名家が江戸幕府下の外様大名として生き残るために、東北アジア、とりわけ明や朝鮮王朝の出版物を購入し、学僧に師事して学問を重視したことについて、伊達家の蔵書を中心に解説しました。そして、江戸中期と後期とは書籍の蒐集の性格が違うこと、大名家の家門維持の上で、宋元版や朝鮮本が重要であったことを紹介しました。

本日の講演内容は

- ① なぜ、桃山時代の戦国大名家は書籍を蒐集したのか (目的)
 - ② どのような書籍を保有したのか
 - ③ いかなるルートで入手したのか
 - ④ 幕藩体制下の大名化した時に効用はあったのか
- という点を中心にお話をします

古活字本 光悦本 謄本 九十九種



11月13日(水) 18:00-20:00 「東北アジア 大地のつながり」

石渡
明先生



日本と大陸の地質のつながりについて解説しました。日本列島の地質と地震・火山、大陸移動説と日本海の形成、大陸の地質と日本へのつながり、そして資源・環境・災害など我々が直面する問題との関連について述べました。講義の内容は、石渡 明・磯崎行雄著「東北アジア 大地のつながり」(東北アジア学術読本) 東北大学出版会(2011年)に沿って行いました。

ロシア沿海州と
西南日本のつな
がりを象徴する
斑れい岩の石碑

ナホトカ・舞鶴姉妹都市記念碑

